

+++
まち普請
ヨコハマ市民まち普請事業
平成30年度
一次コンテストが
開催されました！

平成30年7月14日(土)に一般社団法人横浜みなとみらい21プレゼンテーションルームで、一次コンテストが開催されました。暑かった今年の夏ですが、200名を超える方々が集まり、提案の発表を見守りました。今年度は14件の応募がありました。それぞれレベルが高く、審査員も大いに悩みました。その熱戦を勝ち抜いた以下の7団体が、1月の二次コンテストの対象提案として選考されました。

平成30年度一次コンテスト選考結果	提案グループ名	区名
歴史と環境をテーマに安心して楽しめる里海公園づくり ボート小屋を改修して、公園利用者が安心して利用できる場として整備	富岡並木ふなだまり gionbune 公園愛護会	金沢区
鶴見の多文化・多世代の共創拠点づくり 新築ビルの一部を多文化・多世代が集える場として整備	つみれプロジェクト 実行委員会	鶴見区
世代を超えた集いの場にするための拠点づくり 銭湯を改修し、地域の多世代が集える拠点を整備	おもいやり隊	南区
歴史ある稲荷神社の文化に触れながら憩える場所づくり 稲荷神社の敷地を、安心して集える場として整備	コンコン小径	保土ヶ谷区
日替わり親子カフェ & 子ども食堂 親子カフェにキッチンを設置し、内装を改修	親子カフェ ことろん	栄区
東本郷公園に子どもの居場所をつくる 公園内に地域住民が憩える居場所を整備	子ども・子育て 支援委員会	緑区
「地域遺産」である蟹井戸の湧き水場を整備する 水が湧いている空き地を、地域の人が集える場として整備	空間の湧き水を守る会	栄区

平成31年1月26日(土)ヨコハマ市民まち普請事業二次コンテストが行われます。

二次コンテストでは、実現可能性など具体的な内容について審査が行われ、整備助成対象提案が決まります。一次コンテストからの進化を、ぜひ見に来てください。

日時：平成31年1月26日(土) 9:30~17:00(予定)

場所：横浜市市民活動支援センター(横浜市中区桜木町1-1-56 クリーンビル4階)

【JR根岸線「桜木町駅」北改札徒歩4分 / 市営地下鉄「桜木町駅」徒歩7分 / みなとみらい線「みなとみらい駅」徒歩10分】

地域まちづくり課 “公認” Facebook
「ヨコハマ市民まち普請ひろば」

Facebookに登録していなくても
 まち普請ひろば 検索 クリック
 誰でも見られます。

既にFacebookに登録されている方は、是非「いいね!」をよろしくお願いします。

(Facebookページの運営は協働事務局のNPO法人アクションポート横浜が担当しています)

ヨコハマ市民まち普請事業とは…

地域住民の思いを形にすることでコミュニティの繋がりを
 つくることを目的として、市民提案によるハード整備
 を支援しています。1年を通して行われる、2回の公開
 コンテストを通過した提案に対して、翌年度最大500万円の
 整備助成金を交付しています。参加団体が相互支援
 できる仕組みづくりにも取り組んでいます。

詳しい情報は、横浜市のウェブ
 サイトをご覧ください。 まち普請 検索 クリック

事前相談も随時受付中!

まちづくりの情報を募集しています。

まちづくりに関するイベントや参加者募集、地域で行っているまちづくりの取組などの情報を下記までお知らせください。

メールマガジン「ヨコハマ人・まち」で広報のお手伝いをします。

＜情報提供のあて先＞

横浜市 都市整備局 地域まちづくり課

Email: tb-machizukuri@city.yokohama.jp

「ヨコハマ人・まち」のメールマガジンは地域まちづくりに関心のある方々への転送、お誘い大歓迎です。

メールマガジンの配信申し込み・停止は、ヨコハマ人・まち 検索 クリック

平成30年12月発行

ヨコハマ人・まち
 -まちへ人がまちをつくる-

vol. 56

発行：横浜市 都市整備局 地域まちづくり課

TEL 045-671-2679 FAX 045-663-8641 Email: tb-machizukuri@city.yokohama.jp

取材・編集：NPO法人 アクションポート横浜

TEL/FAX 045-662-4395 Email: info@actionport-yokohama.org

1P~7P 地域とともに育つ

8P ヨコハマ市民まち普請事業
 平成30年度一次コンテストが開催されました!

地域とともに育つ



学校は地域にとって今も昔も特別な場所です。子どもが学び育つというだけでなく、校庭で盆踊りをしたり、運動会や学芸会などの学校行事には地域の人たちも参加し、子どもの成長を祝ったり、喜んだりする、地域の集いの場所にもなっています。そこでは、自分の土地を提供したり、労働奉仕で学校の校庭をつくったりする「普請」も行われてきました。

近ごろは、安全性を優先して学校の門を閉じなければならなくなったり、忙しい親たちが必要以上に学校に関わるゆとりがなくなったりするなど、学校や地域を取り巻く状況が変化してきています。そんな中、子どもの学びや育ちを、親と学校だけに任すのではなく、地域全体で子どもを見守り、共に活動することで、地域はもっと豊かになることに気づき始めたところもあります。学校と地域がともに支え合う、そんな取り組みが横浜でも行われています。

①「みんなの命 守り隊～ともに手をとり合い、生きていく～」(一本松小学校)

西区西戸部町にある一本松小学校は、今年で創立 107 年。親子 3 世代に渡って通う子どもも多い小学校です。地域の行事に教室を開放したり、地域の人たちが学校行事を手伝うなど、学校と地域が非常に密接なつながりを持っています。そんな一本松小学校では、昨年、6 年生が総合的な学習の時間（以下、「総合学習」と略す）※1を通じて地域の人たちとパートナーを組んで、素晴らしい取組を行いました。

※1 総合的な学習の時間

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにするための学習の時間。この時間の目標や内容については、各学校において設定している。

総合学習のテーマは、「防災」

入学以来さまざまな場面で地域に支えられてきた一本松小学校の 6 年 1 組の子どもたちですが、そんな彼らとその年の**総合学習の取組を決めるために話し合った際に、「地域との関係をさらに深めたい」「地域のために何かしたい」という声**があがりました。5 年生の時に担任の福岡先生の育った熊本で大地震があり、先生から震災時の話を聞いていたことなどから、「**みんなの命を守るには、何が必要か？**」を自分ごととしてとらえる児童が多く、「**防災**」をテーマに選びました。

地域防災訓練で小学生は気づいた

防災について取り組むには、まず地域がどのようになっているのかを知る必要があります。そこで「**防災**」を視点にしたまち歩きを行い、気づいたことを学区地図にまとめることから始めました。すると、一本松のまちは「狭い道が多い」「家が密集している」、つまり「大規模災害の危険がある」ということが、課題であることに気づきました。子どもたちの間で「自分たちが地域防災を推進するぞ！まちの人々を守るんだ！」という意欲がさらに高まり、地域で



まち歩きの結果を地図にまとめました

9 月に行われる「地域防災訓練」に参加したいと声があがりました。

しかし、地域防災訓練に参加したいと考えても、いきなり 1 クラス分の児童を地域が受け入れてくれるかどうかはわかりません。

そこで、福岡先生が、自治会連合会長であり、地域防災拠点の代表でもある林会長に相談したところ、「子どもたちが訓練に参加するのは、知識と理解を深める良いチャンス」と快諾いただき、子どもたちは地域の防災訓練に参加することになりました。

子どもたちは、大人たちと一緒に、真剣に防災訓練に取り組みましたが、そこで大きなことに気づきます。それは「**避難所の指揮を執るのは大人だ**」ということ。だから、「**防災**」について**考えていくためには、子どもたちだけで頑張**



地域防災訓練の様子

るのではなく、「まちの大人」と協力していく必要がある、ということです。

避難所運営ゲームに取り組んで、大人が驚いた

地域防災訓練に参加し、まちの大人と協力していくことが必要と気づいた子どもたち。

11 月の総合学習の授業で、避難所運営を体験するためのゲーム「HUG」^{ハグ}を使って、地域の自治会長さんたちや地域の大人と避難所運営の模擬体験をしました。「お弁当が足りない」「どうする？」「水がないよ」「あそこに井戸がなかったっけ？」というようなことから、「**総理大臣が視察に来たいって**」「忙しいから、断ろう！」と子どもたち。すると大人たちは「いやいや、総理大臣はマスコミと来るから、たくさん報道してくれるよ」「寄付がたくさんくるかも！」などなど、災害時



地域の大人たちと避難所運営体験

のさまざまな状況を想定して話し合いました。

その中で、**子どもたちは改めて大人の知恵に気づき、まちの大人と協力する重要性を確認**できました。一方で、**大人たちは子どもたちの柔軟な発想や頼もしい行動力に驚き**、当日参加した自治会長さんたちは「いや、びっくりしたね。子どもたちがあそこまでできるとは驚いた」「子どもって本当に頭が柔らかい」「**いろんなことを考える力があるね**」とおっしゃいます。

総合学習としてのまとめは 防災頭巾づくり

子どもたちは今回の総合学習で、避難所運営を体験し、防災意識がいっそう高まりました。そこで家庭科の授業で学んだ裁縫の技術を生かして、手作り防災頭巾を製作しました。製作にあたっては、学校中に呼びかけてタオルを集めました。防災頭巾は糸を抜くとタオルに戻るという優れもの。それを「万が一の時に使ってください」と自治会に寄贈しました。

小学校 6 年生の子どもたちが自ら考え、企画し、実践した総合学習でしたが、その中で「地域」や「まちの大人たち」とつながることの大切さに気づいたことが今回の成果だと、担任の福岡先生はおっしゃいます。



お手製の防災頭巾を試着

総合学習によって、地域は変わった

この学習は地域にも大きな成果をもたらしました。自治会長さんたちは「子どもが防災について関心を持つということは、親に情報が伝わるってこと」「いろんな行事に親世代の参加が増えた」「子どもたちも地域に顔見知りが増えたので、行事にたくさん参加してくれるようになった」「何より、気持ちよく挨拶してくれる子どもが増えたよね」と笑顔でおっしゃいます。

さらに「若い参加者が増えたので、うちの自治会は、自治会対抗運動会で40年ぶりに優勝できた！」というおまけつき。卒業後も地域と関わっていききたいという思いをもつ子どもたちが育ったこの総合学習は、本当に素敵ですね。

地域との関係をつくるには

福岡先生は「この取り組みは一本松のまちや、まちの人々に支えられて展開していききました。一本松はとても恵まれていると思います。」とおっしゃいます。

「中学生になると、皆、防災訓練の運営側のお手伝いをしてくれる」「小学生でも『何か手伝うことはありませんか?』という子どもが多い」と自治会長さんたちが言うように、地域に育てられた子どもたちが地域の担い手になっています。こういう地域と学校との幸せな関係は、どうすればできるのでしょうか?



(左から) 福岡先生、林会長、浜崎会長、米岡会長、江原会長

福岡先生は「一本松小学校では、まず地域のことを良く知って、好きになることから始めました。すると地域の誰に頼めばよいかわかってきます。また学校側からの一方的なお願いばかりではなく、お互いが助けたり助けられたりという関係を常につくり、地域に感謝の気持ちを伝えることも大事だと思います。これは、どの地域であっても通じることではないでしょうか。」

自治会長さんたちは「学校が塀を高くしているのではなくて、地域が壁をつくっていることもある」「だから、こちらも開いて受け入れる。お互い、ダメもとで話をすること、ですね。」



2 トンボ池や歴史資料館が学校と地域をつなぐ (大道小学校)

金沢区大道にある大道小学校は、敷地内にトンボ池や田んぼなどの風景があり、校舎の中には古民具などを展示した歴史資料館があります。また、コミュニティハウスや市民図書館も併設され、日常的に地域の人たちが学校に出入りする環境がつけられてきました。未就学児をつれたお母さんたちや年配の方々なども学校内にいて、子どもたちも大人たちにすれ違ふと挨拶するという、地域に開かれた小学校です。

はじまりは、まち普請

25年前、創立50周年を記念して、近隣の地域の人たちが学校内に池をつくりました。もともと湧水がある場所で、その水を利用した池は「トンボ池」と子どもたちに親しまれ、池を活用した環境教育活動を学校は長年続けてきました。

ところが、その後隣接する擁壁の改修工事が行われ、その影響で湧水が枯れてしまいました。そうするとトンボ池が干上がって、池に生息する生き物たちの棲みかなくなってしまう。これを残念に思った子供たちは、トンボ池をもう一度復活させたいと願い、その思いを受けた大人たちは「ふるさと大道の風景をつくる会」(以下、「大道村」と言う。)をつくり、平成21年度の「ヨコハマ市民まち普請事業^{※2}」(以下、「まち普請」と称す。)に応募しました。

※2 ヨコハマ市民まち普請事業

市民が地域の特性を生かした身近な生活環境の整備(施設整備)を、自ら主体となって発意し実施することを目的として提案を募集し、2段階の公開コンテストで選考された提案に対して最大500万円の整備助成金を交付するなど市民が主体となった整備の支援を行う事業

大道の原風景が復活

見事、まち普請の助成対象に選ばれ、トンボ池を復活させるために井戸を掘ることになりました。もともとこの地域は、上総掘りの



「ふるさと大道村」のトンボ池と水車小屋

井戸が多数存在する場所でした。当初助言を予定をしていた井戸掘りの技術者が高齢のため指導が受けられませんでした。そこで、会のメンバーは上総堀の発祥の地・木更津の郷土博物館等に調べに行き、必要な道具はつくり、井戸掘り体験を通じて苦労してやり方を学びました。知恵と持っている技術を総動員、延べ2,000人もの地域の子どもや大人たちの手で井戸を掘りました。井戸の水は、学校内の田んぼやハス田、畑で利用され、また奥のトンボ池へと送られます。そこで水車を回し、トンボやメダカ、生き物の棲みかを作ること役に立っています。

大道小学校のもう一つの目玉は「大道ふれあいむかし資料館」です。海も山もある金沢区では、漁業に農業、また林業も営まれていました。そうした仕事に関わる道具や古民具を地域の方々から譲り受け、学校内歴史資料室として整備されています。大道小学校には原風景に加えて、仕事や暮らしなど地域の人たちの営みも継承されているのです。

手入れや講義は「地域」と共に担う

トンボ池、田んぼなどの手入れは、学校と地域で共に担います。トンボ池は年に1度、ヘドロやゴミなどを取り除き、生き物の棲みやすい環境を守っています。そんなこともあり、休み時間になると、池や田んぼの周りに子どもたちが集まります。トンボ池には柵がありませんが、これはできるだけ自然を身近に感じてほしい、という学校と地域の思いが反映されています。時々はしゃいで池に落ちる子どももいるそうですが、非常に浅い池で危険もないし、「保健室には着替えは用意してあります」と富岡校長先生はおっしゃいます。

江戸時代の水田地帯だった頃の大道の原風景が再現され、子どもたちは、トンボ池に生息する多様な生物の観察や、田んぼで作るお米の収穫、サツマイモ掘りなどを通して、自然を身近に感じることができます。

田んぼで採れたお米は、資料館にある足踏み脱穀機や唐箕を使って脱穀します。地域の人たちの指導で、子どもたちは昔ながらの道具の使い方を学び、実践します。また、資料館では畳やふすまなどに触れたり使ったりしながら、昔の生活について学びます。道具の手入れや使い方の指導は「大道村」の方々ですが、**歴史や文化をわかりやすく講義するのは地域の老人会の方々、NPO 法人横濱金澤シティガイド協会も支援しています。地域の方やNPOと学校はパートナーとして協力しあいます。**



「大道ふれあいむかし資料館」

「井戸端会議」が地域と学校をつなぐ

大勢の地域の人たちが出入りし、見た目にも、内容的にも地域に開かれ、地域と支え合う大道小学校ですが、これはどうして可能になったのでしょうか。

「一つのきっかけは、まち普請に応募したことです」と「大道村」の事務局長であり、学校・地域コーディネーター^{※3}の岡さんはいいます。「応募するにあたっては、多くの方々と連携する必要があるので、地域の多様な人たちに仲間になってもらいました。またトンボ池を復活させるという提案の場所が学校なので、学校との連携も密になりました。」。まち普請を進めるにあたっては、情報交換のために、学校と地域の人たちが話し合う「井戸端会議」が始まりました。月に一度の会議は、今も続いています。

富岡校長先生は「**学校の職員は定期的に異動があります。でも、地域と学校には引継ぎをしなければならぬものも多い。それを変わらず住み続ける地域の人たちが担ってくれます。**」と言います。

大道のまちには「何か学校のためになりたい」と思う人が多く、かなり専門的な技術が必要なトンボ池や水車小屋の整備などは、地元の腕自慢の人たちがチームをつくって担っています。毎年お正月には正門に立派な門松が一對設置されるそうですが、それも地域の方が作ったものだそうです。「地域がこれだけ協力してくれる学校は、横浜市内でも本当に珍しいと思いますよ」と校長先生。親子3代通う人もたくさんいるという地域で、「わたしたち

※3 学校・地域コーディネーター
学校で求める教育活動のねらいと、地域の特性や地元の人たちの得意なことを上手に結びつける人材。



みんなで掘った井戸。「希望の井戸」という名前です。

の学校」として愛している人が多いことがわかります。

地域の大人を子どもたちは見ている

だからこそですが、「大道村」の会長の相川さんは、時々学校に関わる大人たちに「**子どもが悪いことをしていたら、その場で大人が叱ること。それが地域の大人の責任だ**」とお説教しているそうです。でも、そんな口うるさい大人に見守られている小学生たちは、居心地が悪いのでは？

「横浜市では、毎年6年生に対して意識調査をします。それによると、わが校は<学校で嬉しかったことがある><地域のことに興味がある>という項目で、市内トップクラスなんですよ」と富岡校長先生はおっしゃいます。

大道小学校の子どもたちは、常日頃から大人たちと触れ合う機会が多く、大人の背中を

学校と地域の連携

二つの学校は、町中にある学校、自然豊かな学校とそれぞれの特色を生かした取り組みや事業を行っています。やり方は違うけれど、共通項も沢山ありました。特に二つの学校の先生や地域の人たちが口をそろえておっしゃっていたのは次のことです。

◎お互い知る努力をして、お互いのことをよく理解していること。

◎できること、できないことをはっきり伝えること。

この根底にあるのはお互いへの信頼感ですが、これが二つの学校と地域では、見事に実現できています。この二つさえ守れば、学校と地域の幸せな関係が築かれるのだったら、真似できると思いませんか？ぜひ、明日から始めてみてはいかがでしょうか？

ています。そのことが、「地域のことに興味がある」子どもを育てています。大人たちが見守って、成長していく大道の子どもたちは、大人の思いをしっかり受け止めています。

お互いが理解し合うこと

こういう地域に開かれた学校になるには、秘訣があるのでしょうか。

富岡校長先生は、「月に一度、顔を合わせて情報交換する井戸端会議は重要だと思います。**メールやSNSでも連絡はつきますが、やはり顔を突き合わせて話をするので、分かり合えることも多い。また、学校はできることとできないことははっきり地域に伝えるのも大事ですね。**」とおっしゃいます。

岡さんは、「私は学校にいる時間が長くなって、学校のことが少しずつわかってきました。いくら地域が望んでも、無理なことはある。**学校と地域の連携は人と人のつながりなので、お互い理解しあうことが基本だと思います。**」



「ふるさと大道村」岡さん（左）と「大道小学校」富岡校長先生（右）